

非暴力直接行動

No

118

10月10日'81

戦争抵抗者インター日本部・大阪市阿倍野区旭町2-12-2。

発行ウリ大阪

都市と現地

— 現地主義とその問題 —

ふうと

こう

1 圧倒的多数としての都市住民

NHKが原発特集番組のなかで、東京都内住民からアンケートをとったら

- 原発を危険と感じてる人——およそ70%
- 原発を必要と考へてる人——およそ70%
- 東京に原発を建てるとしたら反対——およそ70%

という結果がでたという。

ホンマに自分勝手もエエかげんにセエヨ
といいたいとこやけど、待てよ、もしこの
項目の二番目を、「原発拒否」というけど、い
ずれやってくるエネルギー危機をどうする
つもりなんや。最悪の場合、工場がとまり、
失業者があふれ、食糧もなくなる。いまの豊
かなくらいが一変してもエエという覚悟はあ
るんか——という反問を下敷きにして考へて
みると、私らの人反原発はすこぶる無責任
に「そんな極端なことにならんやろ」とい
う楽観論に支えられていることに気付く。



特集

だから「いままたいなくらし方のほうがオカシイのや。くらしが悪くなってもかめへん」と、中気で思ってる人は、数えるほどしかおれへん」ということでは「原発必要多し」とは大同小異、内容的には目ウソが鼻ウソを受つたぐいである――

これが「アヤンケート」を云々するまでもなく、いま、日本の反原発運動につきつけられている状況である。そして、自ら自身をもかくめて、厚顔無恥ともいうべきこの都市住民を一体どうするのか――が、反原発運動の前におかれていたスタートラインである。

運動者が、まず、はっきりと、このことを確認すること、ようやく「都市」へ「現地」の問題は、見えてくるものとなる。

x x x

（東京都心から半径50キロの円内に二千万人、実に総人口の20%弱が居住するそう。そのように、日本総人口の70%を超える人々の生活スタイルは「都市型」で、さらに都市型消費経済は、山間僻地へ植民地侵略のようになんである。

つまり、好むと好まざるにかかわらず、私たちはまぎれもなく圧倒的多数の都市住民の一員にはかならない。

さらに云えば、現地住民であっても、その生活スタイルにおいて都市型の侵入を免れないといえる。）

2 〈原発現地〉と現地のへ反対派〈

ところで「現地」は、というところ――

「このあたりに原発をひとつ……」なんて、電力会社にツバをつけられたが最後、たちまちそれまでの近所づきあいが敵味方。親子、

兄弟でさえ金をめぐる、て対立する。土地売却の印をすっかり捺した奥さんが、責任を感じて自殺をはかるといふようなことまでおこる。

つまり、めったにたたらにバラまかれた札束がつかりだす、收購・供応・汚職・傾廃が落の重都市風俗化の中で、いよいよ原発が建つたとなれば、やれ事故だ故障だという騒ぎをくりかえしながら、放射能をまづ一歩に引きつけさせられるのが現地である。

このようなかで、原発建設をくい止め、遂には立地計画をあきらめさせるという決定的な力キは、最後まであきらかに現地の「地権者」や「漁業権」を持つ人々が握っている。

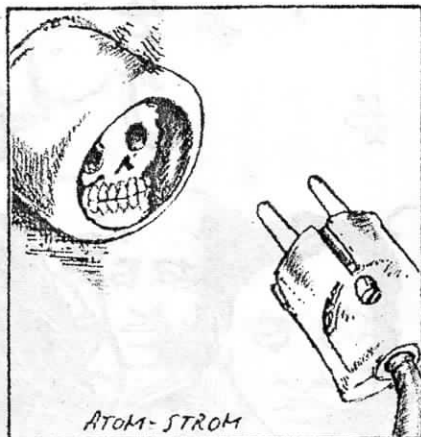
たとえば、福島県棚塩の原発反対同盟の人たち17戸は、東北電力が小高浪江原発計画を発表して以来十五年間

一、土地を売らない

二、県・市・南発公社と話合わない

三、他党とは共闘しない

の盟約をまもり、道でそれちがってモロをさかない、どのような話合いもホイコットする、というテッテイした戦術によって、南発公社や町職員に「どうしようもない」と悲鳴をあげさせながら、



どこからの支援もつけず、自分ら地権者だけの力で建設を阻止し続けてきたという事実は、何よりもそのことの大きさを示している。反対同盟のそのような強い盟約をつくり出しているものは、『**不耕食の文明を拒否する**』という精神であり、委員長の大倉さんは次のように云う。

「都市が与えた束の間の夢を百姓は信じない。今の時代で一番強いことは農地にしがみつくとことだ。他力本願はダメ、応援学生とか支援団体は最後には去ってしまう。だから自力でやりぬく。」

にしかに――

農民が土地を売らなかつたら――

農民が漁業権を放棄しなかつたら――

町議会在賛成多数で誘引しなかつたら――

電力会社は、どうしようもないお手上げだ。最後の手段の強制収用は

あまりに早目がかかる。

その意味で、現地主対派の陣いは、

原発建設阻止のカナメである。

そして、現実には過去十数年間、いままでの原発建設を担い原発建設を阻止、或は延引させてきたのは、まづれもなく現地主対派の人々とそれをたすけた住民たちの力によるものである。

だから、もし現地主、みんな棚塩のような場合であるなら、外部からの支援などむしろ混乱のもとぐらいいいもので、全く無用という

ことになる。



このことは、へ都市へから、そのへ善意へへ思いこみへだけで、へ現地主へへ支援や共助を持ちこむことについて、改めての省察をうながす、重大な示唆だろう。

3 都市のへ現地主志向へ

ほんの数年前まで、都市の反原発といえは、たまにひらく講演会ぐらいいいものだった。

そして、「都市ではどう運動をすすめたらいいかわからへん。やはり現地主へ出かかんと……」というへ現地主志向へが、問題をいつまでも同じところにとどめている状況があった。

ところで、いまごろ生れたへべ平連への運動は、いわばマルギンズムの運動論的呪縛からはじめて自由になって、既成の運動をも大きくゆるがしてひろがった市民運動だったといえる。

べ平連は、規約も綱領もなかった。つまり「運動はどうあるべきか。その意義づけは――」が出発点でなく、「いま自分に何がやれるか。どうやるか」を最初の発足点として、それゆえの形で自由な運動の形態をつくりだすものとなった。へしかした、その運動の無定形ゆえに、いわゆるべ平連下ニネル論などごまわれ、新左翼系党派の草刈り場になる状況もあった。

ベトナム反戦運動が総燃した前後、反公害・反差別の個別的課題をかがけて生れてきた運動のほとんどが、無党派的なマルクス放れの立場に立つものだったことは、このベ平連の流れと無縁ではない。とはいへ、党派的政治主義から脱却はしたとしても、なお活動者の心裡に永年培われたイデオロギーとしての労働者階級主義、生産要素主義、現場至上主義―そして無意識的な反市民主義―の名残りは、清算されなければならぬ。だから現地の運動に促された都市の反原発が、「どう自分らの運動はあるべきか」とをいうとき、イデオロギーとしても、まずへ現地へをカーに志向するのは当然のことだったと云える。

しかも都市での反原発は、敵の姿が全くみえず向うに方法がない。一方現地は、原発建設阻止の戦場であり前線だ。そこを描いて反原発の闘争がありえないのも、又あきらかな事実である。

4 都市の現地主義の出来ることは―



現地志向―これを例えれば桶塩などのへ現地主義の現地へに対してへ都市の現地主義へと区分することで、この問題の一面が、容易に明らかとなるだろう。

つまり、へ現地の現地主義へと共闘するといふとき、へ都市の現地主義へは「一体何を、どうやるんか」とである。

敦賀原発の事故がくしが発覚したあと、敦賀でデモが行われたとき、それにつけた島太、公害研から「汚染されているかもしれないが、僕は敦賀の魚を食べる。その事によって漁民と連帯する」と月刊地域闘争8月号」という発言があったといふ。

都会に住むものが、どうやって、農・漁民と共闘できるか―という、うしろめたさと悩み、苦しみが、この発言によく現われている。

たとえば日高なんかでの、関電KCOAの暗躍なんてものは、部落内に立地部社員を常駐させ、莫大な資金にものを云わせて、朝から晩まで買収と情報集めに余念がない。

それと対抗するためには、将棋のコマを動かすように、敵の動きを見きわめ、こうでたら、こう打つ。あれがきたら、これを、だす。というふうな機敏な動きが必要で、まさに戦場だ。

そして現地での動きと密着したかたちで運動をやらねばならぬとしたら、とても月一回の訪問とか、年に数回行く位では間に合わないことが、常時出てくるだろう。

ざっくり言えば云って、へ都市の現地主義へが出来るとは、「もし、現地が受け入れてくれるとしたら」という条件付で、現地反対派と原発推進勢力との闘いを観戦する応援団として、にぎやかにざわぎたてることぐらいである。つまり、それ以上でも以下でもないものとしての応援団、あるいは助っ人の役割があるにだけ。

「そんなことあらへん。もっと大きな意義を現地支援はもって、いる。たとえば、ヤリリング阻止闘争で数千人の労働者が、いっせいに坐り込んだときの高揚……」というふうな評価は、自分がやるべきでなく、現地の人々の声がそうであるときだけ通用することには気付かねばならぬ。

そこで自分を現地の立場にして、都市にざばりとなことを期

待するか、を考えると一

① カンパ大歓迎。但しいらぬ口出しがつくならお断り。

② 呼びかけにとき、すぐ軍隊としての人手を送り出す態

勢。但し、押しかけや売り込み支援は大迷惑。

③ たとえば裁判等の傍聴。

④ 現地に必要な情報・知識・その他を伝える学者、弁護

士など、軍部家の派遣

⑤ 活動経験から出た知恵・アイディア・やり方・戦術な

どの時に応じての目的の伝達。但し、これは信頼関係があつ

ての上のこと。ほとどのつまり、現地はほとんど都市を信用してい

ないといふこと。そして、それが当然だといふことに思い当らね

ばならない。

いつだったかの集会で、電産中国の書記長が「豊北の漁民と本当
に信頼関係が生れてきたのは、組合が豊北原案阻止のストライキを
うって、就業停止二ヶ月を含む懲戒処分が出るような、クビをかけ
ての陣いをしてからのことだ」といふ報告をした。

この例だけでも明らかのように、集会などで交う「現地の痛
みや怒りを共有する」とか、「連帯」「共闘」「支援」などという

ことは、大都市の現地主義への
一方的なおもひ込み以上をめつた
に出ることはできない。

というより、都市の現地主義が、
そのやれることの現実的限界と
意味を自覚的にとらえなおし、改



5 水まし現地主義。そして現場主義

大都市の現地主義が、自覚的応援団に徹するならば、それは
それで大いに意味があり問題はない。

ところが、それがへ3までのベたイデオロギー的な現地主義か
ら出てきたものであるかぎり、もし、現地が自分の思つような運
動となりえていないとき、その現地主義は、かならずへ現地
介入主義となる。

介入といつても押しかけや房式のいすべてをそこに投げこんで
土着するほどのものではない。ほんのちよっかいをかける程度の
ピラミッド、集会、たまに動員してのデモ行進ぐらいで、終るや否
や都市へ引揚げること、現地を激励したとする一方的介入でし
かない。

へ現地へは、多少のつきあいで、それへのダンに引っぱり出さ
れ、カンパンとして引き廻される。あげくは、都市現地主義の自

めて自分をきびしく見据えてこ
そ、はじめで、自らが課した現
地応援団としての役割をしっかりと
担うことになる。そこから
又信頼関係の次の一歩がはじまる
ものとなるだろう。



▼10・21 国際反戦デー市民のデモに参加しませんか！ 後6時扇町公園・デモ出発8時。ウリ若者グループの列へぜひ。

己満足の後始末と影きようが、よかれあしかれ入りかかってくるというわけだ。

その時の介入の大義名分は「自分もまた現地や」というへ現地の水ましである。たとえば「和歌山県日高と大阪との距離わずか百キロ！ 大事故がおれば我々もまた同じく被害はさけられない！」労働者階級主義がしばしば侮蔑のこもった持ち上げと名目利用であつたように、これほどひどい現地利用はない。

その意味では、三里塚のセクト位にまでなることで、一定の共鳴支援・信頼関係をづくりうるならば、ひらき直つての押しかけ女房の方が、はるかに都市の現地主義として、イデオロギー的に責任をとるものだといえる。

X X X

前記、電産中国と豊北漁民を結びつけたストライキが、現地であつたわけではなく、電産中国自身にとつてへ現場への叩きにほかならなかつた、ということ。そしてそれ故にこそはじめてへ共闘をつくり出したということは、都市の現地主義にとつて重大な示唆を与えている。つまり、自分自身の叩きをつくり出すことで、他とのへ共闘も生れてこない。

そこで、原発建設地に向つた都市のへ現地主義が自分の役割や場所を現地にほとんど持ちえず、また応援団的行動だけにとまりえないとき、或は現地が遠くて殆どかわれないうとき、当然それに代るべき現地をみつける以外にない。都市におけるへ現場主義がそれである。



例えば、へ核燃料輸送

へ八熊取京大実験炉へは

そのへ現場であり、ま

にへ労働者被曝という

ことでの、岩佐訴訟であ

つたりする。

これらが、現場主義として出て

きたときの特徴は、自分の課題を最優先至上

のものとして、他者へは単なる応援でないものを要求して、暗黙

のうちに、労働者主義・生産主義・現地主義的正当性を、ほと

んど無意識におしつけることである。

しかしまた都市の反原発運動は、これらの課題を運動とするこ

とで、原地のへ原発建設阻止と連係し、そのことにおいてへ現

地へのへ共闘が成立する。そして、はじめて都市の反原発は

それらしい運動をもつことになるわけである。

だが、これで都市の運動は、問題のすべてを解消したことになる

だろうか。「反原発が、自分の生き方、くらし方を変え、世界

を変える」という現代的課題と、それはどう結びつくのだろうか。

6 都市での反原発市民運動

いま日本の反原発運動を一瞥すると、明らかに欧米の

それとちがう特殊な問題がある。





るへ都市の現地主義への相克といつてよいだろう。

いにかえると、現地の潜在的な都市不信※と、都市における現地主義へのなかにある都市不信※である。(※9月10日発行「非暴力直接行動」掲載「都市の運動と現地」松下竜二さんが提起した佐賀県西尾勇さんの発言(参照))

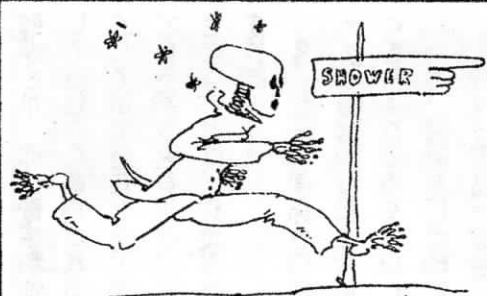
もちろんそれはほとんど表面化せず、それゆえ問題にはなっていない。が、あきらかに現地主義と都市不信との運動の連合をさまたげることによって、それは反原発運動を既成の旧い殻の中に押しこめ、欧米にみられるような新しい質の大衆市民運動へと進み出る道を閉じている。

へ現地主義と都市不信の連合をはぐんでいけるのは、いつまでもなく双方の現地主義である。

とくに、いま私たちが自身の問題としてある都市の現地主義は、ほとんど無自覚なまま、実は労働者主義・生産者主義・現場主義としての大義名分と、それゆえの一その思ひこみによって、かえって都市不信をかきたてているのである。

だがこの問題の解決の糸口は、ちょっと視点をうつがしてみることで簡単に出てくる。

つまり自分の側からでなく、相手の立場から、「原発現地」にとって、都市とは何かを、現地の立場から見直せばよい。



もはや冒頭のアンケートをくりかえすまでもなく、都市は、原発現地の敵であり、植民地化をうめる侵略者に外ならない。そして、私たちもまたのがれるべくもなくその同類である。とすれば、一見いわれなく思えた現地の都市不信は、当然すぎることはないか。

そして、ここではじめて、現地の敵である都市をこそ、また都市の私たちも問題にしなければならぬことが判る。

都市の反原発運動の対象は、はきりいて自分自身のなかにこそある。つまり自分自身をも含めた圧倒的多数の、都市住民こそがそれである。

へすでにこのことについて、さらにそこから出てくる都市の運動の意味、その戦略と戦術については、80年11月発行「9号」へ何故宣伝戦争か。へ現地へ見える敵と都市へ見えない敵へのべているので、紙数の関係から、ここでは重複を省きたい。

X X X

最後に、念のための補記としていくつかのことを列記しておく

1 この小論は、都市の現地主義を決して否定しているのではない。たゞその大勢数にみられる、イデオロギー的影さう下にある現地主義、介入主義を問題にしたのであって、いつまでもなくその役割と限界を自覚した現地主義は、いま以上になされるべき。

2 都市における運動としての、例えば核燃料輸送とか京大実

▼10月12日原燃運市民講座PM6PLP会館ウエネルギー会館で「だからこそ反原発」不払い連と女グループ共同担当、乞う期待▲

輸送とか、或は電気料金問題などは、現地とは別の都市での問題として、もっと重視されるべきものである。たゞそれが「現場主義」として出てきたものであるとき、都市住民としての自分自身が敵手という視座を見失うことになる。つまり、宣伝戦争としての視野をもたなければ、現地からは実質的に無縁の個別運動とみなされてしまうだろう。

3 都市の運動での宣伝戦争のきめ手はーというとき、それがきわめて根底的な社会変革をも意味するために、すこぶるあてどもなくとらえてこるものといえる。

一方、運動を歴史的にとらえるならば、三百年と続いた体制はななく、徐々に変革の要素は地表下で準備される。

変革があらわれるのは、時代の波にも似ている。大きな波のなかまりのきくかけは、例えば原発の事故だったり、強引な建設措置とか、収賄とか汚職などからはじまる。それを波の大きな高まりにするかしないかが、反原発運動の現地・都市をふくめた総立ち上りにはかならない。

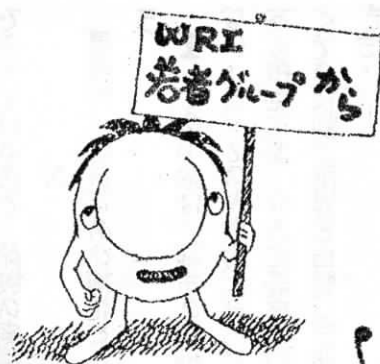
そのときにあらわれる野力馬的附和隨行の市民たちを、（こちらの側の力とするのは、ふだんに行われる宣伝戦争の如何によるだろう。その意味で、宣伝戦争は、反原発の最後の帰すうを決するものでもある。

4 (二)でいう宣伝戦争とは、文字どおりの内容であると共に、非暴力直接行動を意味する。

5 現地の「現場主義」については、ほとんど言及しなかった。が、いま問題は何よりも都市であり、それを描いての云々は、かえ

って焦点をあいまいにするからである。

以上。



9月23日、ウリ若者グループはじめての顔合せは、16才から26才までの4人。お互い知らず知らず、相手のことを少しでも早くわかりあうよう、まずは「インタビュー」式で自己紹介などやった。10月4日や二回目は、新

顔が一人ふえた。とまあ最初の初仕事は、10・21反戦デーへの参加・お便り、参加希望の贈話などまつてます。連絡下さい。ハ若さは早令できまらない、を合言葉に。ハ立木弘



あとがき

▼本号特集は、ぼくら自身も又、現地主義にとらわれていて、それを打破るために書いたと云える。▼これが都市運動の展望をすこしでも切りひらくものであるように、とねがいながら、一歩発表するのにすこし決心がいったというのが正直なところ。▼まだ入らない批判、反論をうけて論議をふかめたい。

ふう&こ

▼九州から帰ってすぐ三島へ山腹みかさの病気見舞などというわけで勤務が大変。おまけに10月に入って毎日のように行事や集りがついで、これを出すだけがやつとこさ。手紙の返事などおくれにおくれます。おゆるしを。

10月5日(考)

宇利のふか万のあけや 山景 雲天雨乃全載

振替口座 大阪一三三三三七 ウリジャパン 向井友